

その筈では、学生・教員は夕食を一堂に会して取らなければならず、席位置は早いもの順。ある日は歴史学の教授、ある日は生命工学の大学院生が隣に座り、彼らと英語で自分の専門分野について会話をすることになる。当時は普通だったが、今ではこうしたことが新発見につながってい

その話をとある電子工学専門の大学教授にした。彼はケンブリッジ大学での経験を話してくれた。

その話をとある電子工学専門の大学教授にした。彼はケンブリッジ大学での経験を話してくれた。

に、一貫関連性がない研究者を隣接させている。それによって異分野から刺激を受けるようにしている。

ユニークな点は研究室の配置方法だ。例えば昆虫学者の隣がコンピュータサイエンス研究者といったように、一貫関連性がない研究者を隣接させている。それによって異分野から刺激を受けるようにしている。

た。近年、優れた実績を上げており、注目が高まりつつある研究機関だ。

れる。日本企業では、知の探案が特定の組織に丸投げされ、既存事業部が関わらないケースが多いように思える。イノベーションは一部の人が起こすのではない。会社内に「知の越境」を促す仕組みを作り、全員がイノベーションとなることが重要だ。(不)

知の越境

ここで、企業の持続的成長とイノベーションを両立させる考えだ。しかしながら、多くの企業は得意分野にこだわり、知の深化ばかりに傾注してしまいがちだ。これはサクセストラップ(成功のわな)と言われる。

ると気づいたという。二つのエピソードに共通するのは「知の越境」がイノベーションをもたらすということだ。経営学では「両利きの経営」が話題になっている。得意分野を深める「知の深化」と、本業から遠いところで新しいものを発見する「知の探案」。両面をバランス良く行う



経済気象台
先日、沖縄
科学技術大学
院大学を訪問
する機会があ

この欄は、第一線で活躍している経済人、学者ら社外筆者が執筆しています。